長岡京跡左京第５３９次発掘調査成果
～ 一条大路南側溝の調査 ～

所 在 地：向日市鶏冠井町十相25
推 定 地：長岡京跡一条大路・左京二条二坊十六町、鶏冠井遺跡、石田遺跡
調査期間：平成23年１月11日～3月18日
調査面積：400㎡
調査機関：財団法人向日市埋蔵文化財センター（担当：國下多美樹）
調査所管：向日市教育委員会

１　はじめに

調査地は、標高14ｍの氾濫原に位置します。長岡京跡（784～794年）の条坊復原では、一条大路南側溝を含む左京二条二坊十六町北端中央に推定されます。また、縄文～弥生時代の集落跡である鶏冠井遺跡、石田遺跡にも含まれます。今回の調査は、市指定史跡・離宮跡「長岡京東院跡」の性格を解明することを主目的に実施しました。その結果、一条大路南側溝、町内溝、建物跡等を確認しました。特に、一条大路南側溝は、掘削されて廃絶するまでの過程についての詳しい情報を得ることができましたので、その成果を報告いたします。

２　発見された遺構と遺物

Ａ　主な遺構

地表下約30ｃｍで現れる砂礫層面で、長岡京期、縄文時代の遺構を確認しました。

〔一条大路南側溝ＳＤ53901〕　調査地の北側で確認した東西溝です。幅約３ｍ、深さ約0.6ｍ。25ｍ分確認しました。溝内の堆積土は３層（上・中・下層）で、３段階の変遷をもって埋没しています（溝ＳＤ53901Ｃ→Ｂ→Ａ）。

古段階の溝ＳＤ53901Ｃは、砂と礫を主体とする地層で長岡京期の遺物が多数出土しました。長岡京があった頃、相当の水量をもって側溝が機能していたことを示します。側溝内からほとんど摩滅していない遺物が多量に出土したので、近傍の宅地からごみが日常的に廃棄されていたと推定されます。

中段階の溝ＳＤ53901Ｂは、地盤の砂礫を含むやや粗い粘土系の地層です。長岡京期の遺物が多数出土しました。粘土系の土を混じえることから、側溝は水位が下がって泥土が溜まる状態になり、何度も両肩に向けて溝さらえしたことがわかりました。

新段階の溝ＳＤ53901Ａは、粘土系の土です。溝の中央付近のみ堆積しています。溝の中央近くを掘り直し、側溝が機能するよう改修された痕跡です。調査区の中央付近では、クランク状になり幅が狭くなります。この場所は宅地の中央位置に面する場所です。溝の両肩には人頭大の礫が置かれています。このような礫は橋を架ける際の押さえとして頻繁に発見されるので、出入り口として橋が設けられていた可能性があります。

新段階の溝は最終的に泥土で埋まり、排水機能はほとんどなくなったと考えられます。その後、全体が埋め戻しされています。この埋め戻しは、長岡京が廃都され平安京に遷都した頃行われたと推定されます。

〔溝ＳＤ53902〕　一条大路南側溝の南約2.3mの位置で並走する東西溝です。幅0.7m、深さ0.3m、25m分確認しました。埋土は、礫混じりの粗い粘土で一条大路南側溝の中層に類似します。この溝は、調査地の西70mで東二坊坊間東小路下を貫通することが明らかになっています。条坊施工時ないし以前、宅地北限にあった築地の雨落ち溝、条坊施工のための基準としたなど、色々な機能が考えられますが、現状では性格を特定できません。

その他、宅地内で柱穴列が確認されていますが、建物配置や性格を復原できる情報はありません。

Ｂ　主な遺物

縄文時代～江戸時代までのものがあります。大半は長岡京期の土器類です。

〔縄文時代〕後期縄文土器（宮滝式）、石鏃、サヌカイト剥片

〔長岡京期〕土師器、須恵器、緑釉陶器（小壺蓋）、軒丸瓦、軒平瓦、平・丸瓦、凝灰岩、砥石、土馬、土製紡錘車

〔平安時代〕須恵器

〔鎌倉時代〕瓦器

〔江戸時代〕陶磁器

３　まとめ

今回の調査では、一条大路南側溝を確認し、規模・構造を明らかにしました。長岡京の道路が機能していた時期から廃都に伴って埋め戻されるまでの具体的な過程を再現できました。

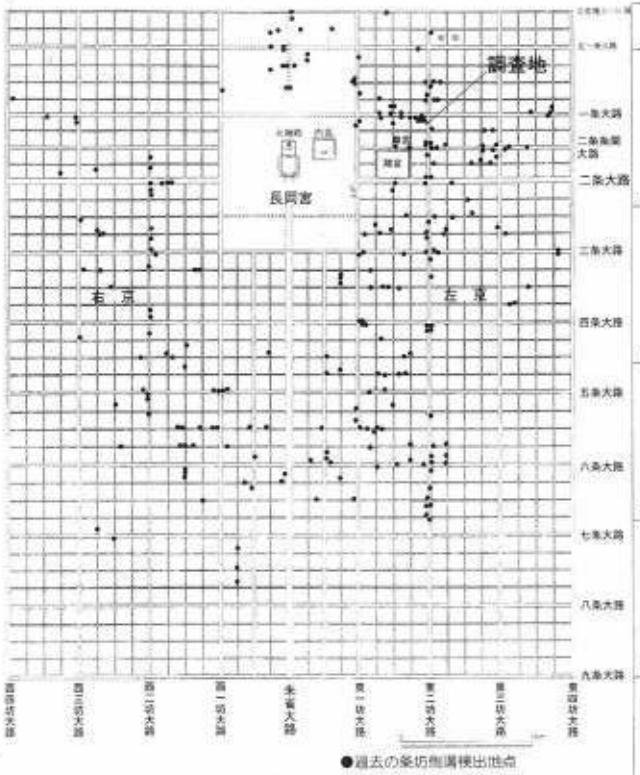
一条大路は、過去14箇所の調査で確認されています。その成果から側溝心々間幅23～24m（80尺）の大路規模であることが明らかになっています。

今回の調査で一条大路の南側溝は、少なくとも東二坊坊間小路～東二坊大路間の東西約360m以上にわたって大規模な溝として造営されていることがほぼ確定しました。

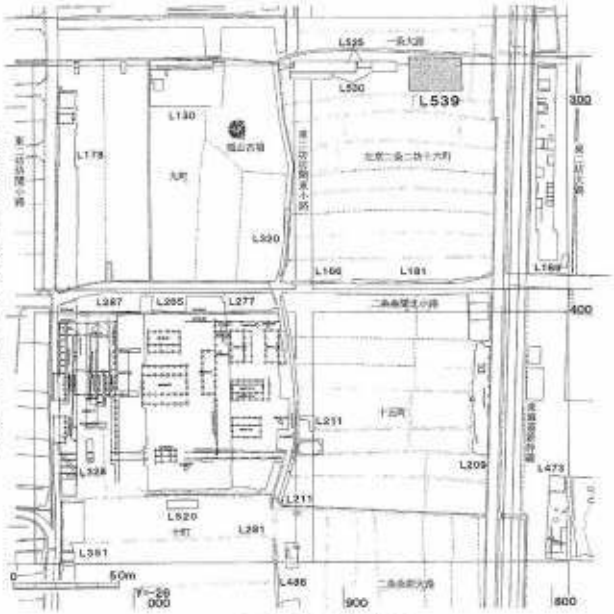
長岡京左京北部の東西道路（条路）における側溝の確認例では、二条大路側溝（幅約６m）に次いで規模が大きく、**左京北部における基幹排水路**として機能していたことがわかります。調査地付近は凹地で排水が集まる地形環境であったことが関係しているものと考えられます。当初、排水機能をもっていた側溝も次第に泥土を溜める溝となり滞水気味となったようです。そこで、溝の浚渫（掘り直し）を行い、道路や宅地に排水が溢れないよう工夫しています。一条大路が京の道路として重要度が高かったからこそ側溝の維持に努力したのでしょう。溝は最終的にたくさんの食器や建築資材、食物残滓とともに人為的に埋め戻されていました。この段階は、溝の最上面で長岡京後半期の軒瓦や9世紀の須恵器が出土したことから、長岡京廃都（794年）後、耕地としての新たな土地利用の開始が契機となった可能性が高いものと考えられます。

ところで、一条大路～二条大路間の宅地域は、大極殿・内裏に面する京内でも特別な街区にあたります。調査の契機となった左京二条二坊十町は離宮跡と推定され、周辺の宅地は離宮に関係する役所が配置されていました。

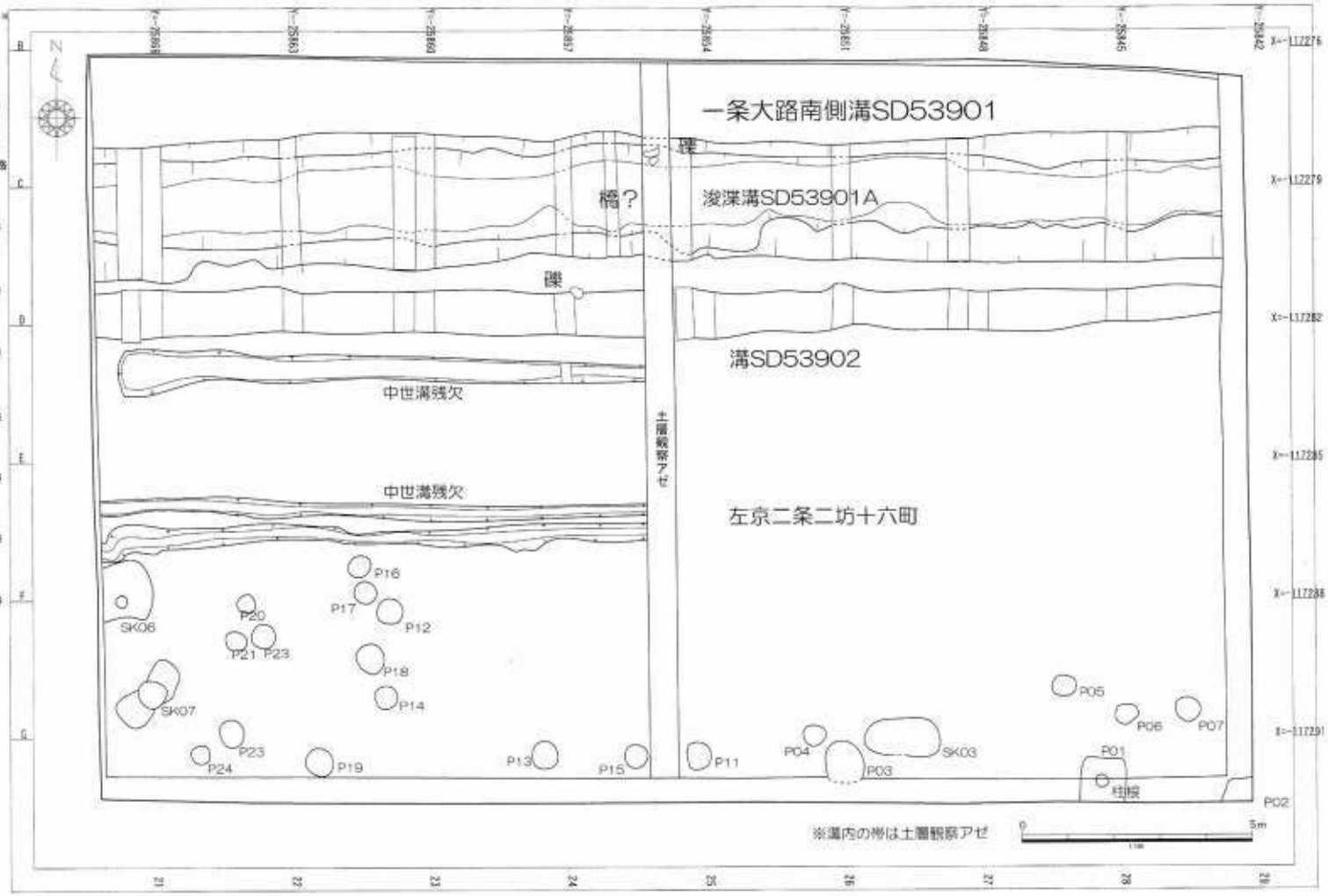
一条大路は、天皇にかかわる特別な空間の北を画する大路であり、**都城のなかでも重要度の高い条坊であった**と推定できます。道路側溝の規模や溝の維持管理の実態は、京域における下水処理ばかりでなく道路に面する宅地の性格とも関係していたと考えられます。



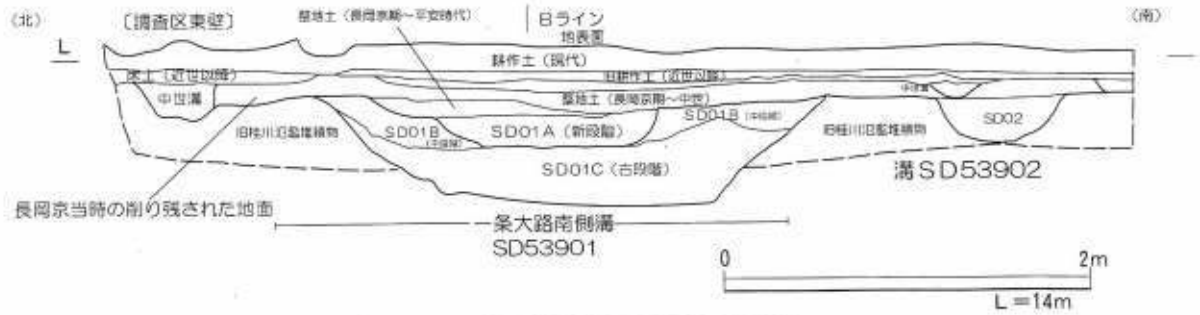
第１図　長岡京条坊図と調査地の位置



第２図　調査地周辺の成果



第３図　調査地平面図（長岡京期）



第４図　一条大路南側溝ＳＤ53901の断面

A#版配付資料をA4版に縮小